松山幸生先生講述

ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

全32回--26

2023年09月

写者

小原靖夫

第26回(1)

11章のまとめ「信仰」「信仰によって」

　諸般の事情で３ヶ月間休会となりましたので、今回はおさらいをして、11章を見直し、確認するところから学びを起こしてみたいと思っております。

　この手紙は紀元70年代、或いは80年頃に書かれたものだと言われています。その時代背景を考えてみますと、キリスト教とユダヤ教との輪郭がまだはっきりせず、それぞれが違う宗教だという形で確立されていなかった時代であった、と見ることができます。

　「ユダヤ教の方では」、キリスト教は自分たちの一分派ではあるが、「極めて異端的な危険な分派」だと考えていました。それは、生前のキリストの言動に対するユダヤ教当局者の反応とまったく同じで、弟子たちはその教えを引き継いでいるゆえに、非常に危険な思想を有する存在という意識を絶えず持ち続けられていたようです。

　ところが、「キリスト教の方では」、主の多くの弟子たちは、自分たちはユダヤ人としてユダヤの地で一緒に生活をする中で、特段、ユダヤ教に抵抗したり、対抗したりして別な宗派を作ろうという意識は殆どなかったようです。ユダヤ教の会堂(シナゴーグ)で礼拝を守り、ある意味では渾然一体とした形で信仰を保ち続けていたと見ることができます。

　ですから、この当時は主の日（日曜）ではなく、安息日（金曜日没～土曜日没）にきちんとシナゴーグに行き、ユダヤ教の習慣に従って礼拝を守り、祭儀に参加していました。
　唯、その他にイエスが甦られた日（主の日）を覚えて、それは宗教行事としてではなく、「自分たちの信仰を確認し合う集会」として教会の集まりが持たれていたのです。
よって彼らは「ユダヤ教の祭儀とキリストの復活を記念する集まりとを、同時平行で持っていた」という状態に置かれていたのです。153

ところが、その渾然とした状態の中で、一部に「イエス・キリストの十字架は私たちの贖いのためだったのだ。そして、イエス・キリストの甦りによって、私たちも復活し救われるのだ。」という、ユダヤ教とはまったく異なる教理を打ち出して、この路線だけは譲れないと、非常にはっきり認識する人々が現れ出て来ました。やがては、ユダヤ教徒との間に、明確な信仰における『溝』が生まれて来た、そんな時代だったと考えられます。

（短い文章の中に、歴史的にキリスト教徒がユダヤ教から離れてゆく過程がわかり易く記されています。）

無論、「異邦人キリスト者の教会」には、そのようなややこしい問題は元々なかったのですが、特にこれは『ヘブライ人に向けて書かれた手紙』ですから、ユダヤ人クリスチャンに、そのように明確なキリスト・イエスの福音理解、十字架の贖いに対する信仰が起こってきた一方、時には、ユダヤ教の律法によって信仰の教理がすり替えられたり、祭儀を守ることにより救われるのだと教えられたりするような形で、大きな揺さぶりがかけられたことを考えますと、ここで言われている意味がよく分かるのではないかと思います。

かようなキリスト教会の中には、「もう一遍ユダヤ教に戻ろうよ」という「ユダヤ教回帰志向」に陥る者や、ユダヤ教の人たちとうまくやっていこうという考え方もある程度広がっていました。[153]　その一方で、そうした考え方に反対し、「イエス・キリストの十字架の贖い、あれを何と心得るんだ！」と本気になってイエスの福音を抗弁する人々が現れて来ました。

そうした人々にとって、ユダヤ教回帰志向は無視し得ない非常に危険な思想と捉えられ「キリスト教会の分離危機」が強く叫ばれるようになっていったのです。

そして「福音を福音として語ってゆかなければならない」つまり「福音が福音として受け止められないところでは、イエスをキリストと信じるというキリスト教は存在しない」ということを、当時の教会が色々な角度から大きく取り上げ始めるようにもなりました。

それはこの手紙だけではなく、ユダヤ教教育を受けたパウロの書いた手紙の中にも沢山出て来ます。例えば「ガラテヤの信徒への手紙」の中には「**あなたがたは、こんなに大きな恵みをいただきながら、忘れてしまったのか**」という言葉で、どうして昔の慣習や律法に戻ろうとしているのかと訴える部分、あの有名な箇所の「**ああ、ものわかりの悪いガラテヤ人よ**」という言葉で書き始めているところです。それは「ローマの信徒への手紙」の中にも見えて来ます。勿論、パウロ行伝と言われた「使徒言行録の後半の部分」にも、この事柄は沢山出て来ます。

ですから、当時の教会には「福音が信仰の最も大きな部分だとしっかり受け止め切れない状況」がまだ残されていたということですが、逆から捉えれば、わざとその状況を残しておいて、それを引きずってみせることで、ユダヤ人からの白眼視あるいは迫害を、少しでもかわしていこうと考える教会指導者も少なからぬ時代だった、ということです。[154]

簡単に言えば、「割礼はあってもなくてもいい」というパウロの見解を上手に使って、「ユダヤ教の人々から変なそしりを受けないために、割礼を受けようではないか」と異邦人に勧めた指導者も現実にいたわけです。それはなぜかと言うと、結局、「キリスト教は、割礼に関しユダヤ教とは違うと言い切ってしまうと、地域に圧倒的多数を占めているユダヤ教徒から迫害される」、それが怖かったのです。

ですから、「非常に危機的意識を持って、この時代のキリスト教会は歩みを続けていた」と考えられます。それは外側の異邦人たち、換言すれば、ギリシャ文化あるいはグレコローマン文化の中に育った政治を司る人々による外側からの迫害よりも、彼らにとっては堪(こた)えたのです。また、それだけに耐えがたい迫害だったのかもしれません。

そのような状況下で、この手紙が書かれたと言えるでしょう。「こんな迫害下のユダヤ社会の中にいたのでは、福音を福音としてしっかり守って行くことはできない」と考えた人々は、「ユダヤ社会から飛び出し、いったん外の異邦人の世界に向けての宣教を行い、その足場をもって、再びユダヤ人の世界に向かって宣教を発信してゆく中で、自分たちの立ち位置を確立してゆこう」という考えを持つようになりました155

こうして、ユダヤ人の迫害から自分の身を守るために、外に向かって伝道してゆこうと考えた教会は、豈はからんや、今度は、教会以外の文化、ヤーウェを信じない人々の持っている文化と対決せざるを得なくなるのです。そういう人々からの迫害をも受けなければならなくなって来ます。その意味では『二重の迫害』を受け始めていたのが、この手紙を受け取った人々であったと考えられます。

しかし、そのような状況はよそ事ではなく、現実に私たちが今生きている社会の中にもあるのです。宗教的な白眼視、政治的な圧力、その両方のものから責めたてられながら信仰を宣べ伝えていかなければならない、証ししてゆかなければならないという現実は、今日の私たちの国にも明確にあります。日本の国内だけではなく、特に東南アジアあるいは東北アジアにおけるキリスト教の宣教は、殆どの場合、重い迫害を浴びながら、進められているのではないかと思います。（松山幸生先生の口述から四半世紀すぎた今、この傾向は更に強化されています。先生の先見性が各所に見られます。）

ところが、日本の風土では迫害の存在がなかなか受け止められない、教会自体がそのように受け止めていない。なぜか。「文明開化ということで、明治以後の日本の政治の流れや歴史の潮流が、国家形成の歩みを欧米に習うという格好を取ってきました。言い換えれば、キリスト教文化が醸し出した上に成り立っている一つの飾られたもの（欧米のキリスト教美術・音楽・文学などへの傾倒による、日本文化からの価値観の転換）や、また、欧米流の新しい生活様式への憧憬によっても進められて来ましたから、何となくキリスト教的なものへの肯定感が残っています。ですから、キリスト教的なものに対する正面切っての国家の対決とか排斥とか排除とかは、起こりにくいと考えられる状態だった」のです。

しかし、今から60年ほど前（太平洋戦争のこと）に、私たちの国がその欧米を相手に戦争を起した時には、「キリスト教教理は敵国の思想の中にある」ということで、教会は他の宗教や国家から大きな弾圧を受けました。それに勇猛に立ち向かっていった人々は、今度は更に厳しく、国家権力によって弾圧されていったのです。

そのような歴史があったわけですから、正にあの時代の教会を考えてみることは、この手紙を理解するのに役立つだろうと思うのです。自らが、神の前に清いものでありたい、潔白でありたい、信仰を信仰として保ち続けたい、福音を福音として残したいと考えた教会は、本気になって、そうでない発想から起こる一切の制限や制約や弾圧をはね除けようとしました。が、そのために投獄された牧師たちも信徒たちも少なくはなかったのです。157

その中で、イエスをキリストと信じるとはいったいどういうことなのか、それほどはっきりした意識を持っていなかった信徒たちは、心の中で煩悶し始めました。一体キリストを信じるとはどういうことか、国家権力に楯つくことが信仰なのか。おかしなもので、そうした場合は大勢が賛同する方が正しいと思うものです。少数意見は何となく違っていると考えてしまう、その方が安心だから・・。（安心だからだと思っている方向に原子力にかかる諸問題があり、戦争が待っていることを知る人は少ないのは今も変わらない現実です。）

この手紙が書かれた時代もそうした発想に教会も取り込まれつつあり、「ユダヤ教の方が、イエスも元々そちらの信仰を信じていたのだから、私たちの拠り所になるのではないか。そのユダヤ教の信仰の中からイエスの信仰や、贖いや、救いが出て来ているのだから、私たちもそのユダヤ教に立ち返ればこの救いがもっと自分たちが容易に多くの人々と共有でき、喜んで生きてゆけるものになるのではないか」という誤った発想が広がっていきますと、そこに「ユダヤ教復帰運動」が興って来ました。

それに対して、そのような状況の中でこの手紙を書き、「そうではない」ということを言わざるを得なくなった、「それがこの手紙なのだ」と考えてよいのではと思います。

そのようなことを、ユダヤ教に復帰しようとする人々に第一に訴えなければならなかったので、著者は最初の部分でトーラーを徹底的に取り上げ、律法問題を取り上げてゆきます。そしてその中で一番中心に取り上げたのが「大祭司キリスト論」だったのです。

（”否”と言える覚悟を持っていなければならないと教えられました。）

彼は「ユダヤ教の中の教えをしっかり保持しながら、現実の歴史の中で厳しい罪と神の清さとの間に立って執り成しを為し、それを維持し続けるために立てられた大祭司、その役割は本来レビ族出身者のものだが、真の大祭司になり得るには、罪を全く負わない者でなければならない、それこそがイエス・キリストである」という形で、「キリスト大祭司論」を延々と展開して来たわけです。

その度に、「ユダヤ教の人々が抱いてきた大祭司とは質が違う、内容が違うのだ。なぜなら彼らは外からもって来た犠牲を神の御前に献げ、民衆の罪を赦してくださいとお願いしたけれども、この真の大祭司キリストは、外側のものではなく御自身をお献げになり執

り成してくださった。御自分の命を捨ててまで私たちを愛し、憐み、神の御前に執り成しをしてくださった」と、イエスの贖いの十字架による「贖いの唯一性、一回性」を非常に強く主張しています。

だから日毎に罪を悔い改める献げ物、感謝ための献げ物という祭儀を繰り返すのではなく、キリストの御心を生きること、それこそが私たちの本当の生きるべき道ではないだろうかと、そこで『信仰論』の問題に入っていくわけです。

信仰とは、「イエスをしっかり受け止め、その贖いにすべてを託し、そこから生まれ出て来る神との生きたすべての関係を、毎日の生活の中に取り込んで具体的に歩んでゆくこと、それこそがイエスをキリストと信じることに他ならない」のです。

しかし、「その祭儀が必要ではなくなった」と言われると、ユダヤ人にとっては、「では私たちがもってきた歴史はどうなるのだ」という問題は当然起こって来ます。160

そこで、祭儀を重視してきたユダヤ人に対しては、「あなたがたが歩んで来た歴史は神によって導かれて来た歴史であって、それは無駄ではない。そこには価値があり、意味があるのだ」ということを、もう一度『ユダヤ教に回帰する形』ではなく述べなくてはならなかったのです。それが11章で『信仰によって』ということを沢山書いて来た理由なのです。そういう11章の背景を受けて、12章では「こういうわけで」というところから書き始めるわけです。（この説明によって、11章で繰り返された「信仰によって」の意味がわかりました。）

結局、神から選ばれて神の恵みのもとに歩んで来た多くの先達たち、旧約聖書の中で歩んで来た信仰の先達たち、生涯をかけて彼らが歩んで来たその歩みが一体何のためだったかを、もう一度思い起こしてみてくださいということを、彼は11章で訴えました。

彼はその中で彼らが色々な厳しい道を歩み、アブラハムにしてもイサクにしてもヤコブにしても、あるいはその後の多くの人々にしても、困難な道を選んで神の言葉に徹底的に服従したのは、「終わりの日」のため、神と共に生きる者として神の玉座のある神の国に招き入れてくださるその日に、私たちが神の招きを頂くために、その終わりの日に向けて彼らはその忍耐の道を歩み抜いて来たのだ、と言うことができるのです。

自分の判断や、この世の中の判断や、一般的な発想ではそんな馬鹿なと思うことがあっても、「神の御言である」という一事において従い抜いて来たのは、正にそのことのためだった。まだ見ていない、まだ知らされていない、終わりの日が来る。それは、私たちが未経験であり、未確認であり、無知であるがゆえに、未だ見えて来ていない「ある日」であるのである。

だから、今、見える価値観だけによってすべてのことを決めないで、終わりの日、神がおいでくださる時に、私たちが神の御前に立つことができる者となるために、「神の求め

られておられることや、神の御言に徹底的に従い抜いた先達たちのことについて」11章までのところに書かれてあるわけです。

「その救いの完成を与えられる日に向かって、彼らは歩んで来たのだが、私たちはどうなのでしょうか」そこのところが、すごく重要な点なのです。
私たちはその終わりの日に立ち会うことがゆるされている民なのかもしれない。または、その終わりの日、すべての完成の恵みをこの世に向かってはっきりと証しする群れになるのかもしれない。「だから私たちはそのことのために忍耐しよう、頑張り抜こうではないか、今の周りの判断や多くの人々の声に耳を貸さないで、心を乱さないで、終わりの日に向かって目を見開いて歩んでゆこうではないか」ということを、ここでもう一遍呼びかけているのです。（まさに、今の私たちに呼びかけられているのです。少数者こそ残り者になる使命があると思いました。）

写者から一言
今回も森容子先生に松山幸生先生の歴史的背景に関連する説教をお願いしました。

「神の器に」に仕えるアナニア

使徒言行録　９：１０－１９a　　森　容子

これから語りますお話の背景には、サウロ（後のパウロ）に生じたダマスコでの回心の出来事がございますが、それは使徒言行録に三度も登場する重要な記事で、皆さんもよくよく御存じのストーリーと存じます。ですが、実は、今回の説教の真の主人公はそのサウロではなく、キリストの光に打たれて目が見えなくなったサウロの元に遣わされた、主の御弟子なるアナニアであります。

エルサレムでは、執事のステファノが最初の殉教を遂げた後、ギリシャ語を話すユダヤ人キリスト者（ヘレニスト）が、ユダヤ教当局者たちからの大迫害に遭い、ヨセフスの『ユダヤ戦記』によれば、紀元66年にはダマスコで１万８千人ものヘレニストが虐殺されたそうです。

さて、サウロ（かつての王名で、欲望との意味）は、大祭司アンナスより全キリスト者を捕縛するための許可を得、遠くダマスコまでやって来たのです。「男女を問わず縛り上げ」という捕縛は、主の生きておられた時代にもなかった程の残酷な処罰でありました。
しかし、今回のサウロのダマスコ行きの、主による真の目的は、全キリスト者の捕縛ではなく、サウロ自身が天よりの光に打ち倒されて、彼こそが、キリストその御方に捕縛さ

れるためでありました。それによって、彼が、古き自分に死んで、新たにキリストの衣をまとう伝道者として生き直すためであったのです。

そして、そのためには、三日間、全く目が見えず、食べも飲みもしないという「霊的な死」の体験が必要でした。この間、聖霊は片時も離れずサウロに寄り添い、新生、聖化の準備をされていたことでしょう。

ここからが本日のテキスト10－19a節です。

10－12節

ところで、ダマスコにアナニアという弟子がいた。幻の中で主が、「アナニア」と呼びかけると、アナニアは、「主よ、ここにおります」と言った。すると、主は言われた。「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈っている。アナニアという人が入って来て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるようにしてくれるのを、幻で見たのだ。」

１０節に登場するアナニアは、「神は恵み深い」という意味の名前で、彼は、迫害で散らされたヘレニストではなく、元々ダマスコに住んでいて、ユダヤ人の会堂（シナゴーグ）で礼拝を守ってきた主の弟子でありました。

彼のことは、この先２２：１２に「律法に従って生活する信仰深い人で、そこに住んでいるすべてのユダヤ人の中で評判の良い人でした。」とあります。誉め言葉のような紹介文ですが、よくよく読みますと、信仰的には敬虔なキリスト者を装いながらも、生活面ではユダヤ教の律法遵守を心がけていたという、信仰と生活とを分けて暮らしていた、どっちつかずの「八方美人」であったと言えましょう。（森容子先生の聖書の読みの深さにも尊仰します。）

彼は、ダマスコに住むユダヤ教信者にもユダヤ人キリスト者にもいい顔をして、両者間にバランスを取って、迫害の嵐の中を生き延びていた人物であったと思われます。主はそんな彼に「アナニア（神は恵み深い）」と呼びかけられます。「主よ、ここにおります」というアナニアの即答は、この呼びかけが初めてではないことを示しています。主はすでに以前から、この彼に御目を留めておられたのです。

１１節の「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ、行き」という御言の中で、主は、アナニアに対し、非常に重要なことを告げられています。

まず、「立って」と訳されているのは、正確には「立ち上がって；アナスタシス」という言葉で、それはイエス様の甦りを表わした言葉であると共に、死者の中からの甦りを表す言葉でもあります。つまり、信仰的八方美人のアナニアに、主は、「（あなたは迫害という現実の中において、妥協と諦めと保身という枯れ骨の谷で、信仰的に死んでいないで）死者の中から甦りなさい！」と告げられたのです。

次に「『直線通り』と呼ばれる通り」のことですが、『直線通り』には、まっすぐ、とか、正しいという意味があり、「真っ直ぐ正しい道に向かう」という意味に採れます。それに続き「〜を行き」と訳されている言葉も、通常の行き来に使うエルコマイではなく、ポレウオマイという特別な用語で、「訪ねる、旅立つ」という意味が含意されています。

これらをつなげますと、主はアナニアに、「あなたは死者のような自分から甦り、真っ直ぐ正しい道に向かって、旅立ちなさい」と告げられたことがお分かりになるでしょう。

主は、アナニアをサウロの元へ遣わされる前に、彼自身の信仰と生活とにおける正しい一致と、悔い改め（方向転換）を求められ「八方美人」を質されて新しくされたのです。

そしてもう一つ、１２節の「元どおり目が見えるように」というサウロへの癒しは、アナブレポーという言葉で表わされ、これは、アナ（再び）＋ブレポー（見る）という単純な造語でなく、「神を見上げ、神を仰ぐ」という特別な意味を持っています。（このように原点に忠実な説明をしてくださることによって正しい理解が深まります。）

つまり、主がアナニアに求められた祈りは、天からの光でつぶされたサウロの目が再び見えるようなる、という単なる視力の癒しだけでなく、それよりも何よりも、その目が、イエス・キリストを真の神様として見上げる、仰ぐことができるようになるという神癒の御業です。これらの事は皆、後のアナニア自身の告白によって知らされている証しです。

13―１４節

しかし、アナニアは答えた。「主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。ここでも、御名を呼び求める人をすべて捕らえるため、祭司長たちから権限を受けています。

この１３－１４節の主の御命令に対するアナニアの拒否も、当然と言えば当然と言えましょう。サウロは全キリスト者の敵、いとも恐ろしげな鬼だったのですから。主の御達しといえども、おいそれと「ハイ」とはご返事できないでしょう。

サウロに近づけば、サウロから恐ろしい迫害が襲ってこないとも限らず、一方、そのサウロを助けたりすれば、仲間のキリスト者たちからどんな酷い目に遭わされるか分かりません。今まで八方美人という習い性をもって、世間をうまく渡ってきたアナニアさんとしては、回心させられたといっても、この命懸けの究極の選択には、困り果てますよね。

15－16節

すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。

しかし主のご命令は、11節の「旅立ちなさい」という促しから、15節では「行け！」と変わり、もはや一刻の猶予も躊躇も与えられません。そして、アナニアの頑なな拒否が転じたのは、もしかしたら、サウロのことを「わたしが選んだ器である」と言われた御言よりも、むしろその後の、「わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう」という御言の方だったのでは、と言う方があります。「鬼のサウロが、これからものすごく苦しむのなら、それならば、私アナニアは加担します、お言い付け通り、喜んでお手伝い致しますよ。」と。

ですが、私はそのご意見には賛同しかねます。アナニア自身も、主の霊的な光に、自身の闇が照らし出され、死んでいた信仰が甦り、ものが見えなくなっていた目が開かれて、真にキリストを仰ぐ者と変えられたに相違ないと信じるからです。

「No Cross No Crown」という言葉があります。「十字架を背負うことなくして、栄光なし」という重い言葉です。回心をしたのはサウロのみならず、まず、遣わされるアナニア自身が主によって悔い改め、回心せられたのです。そして、主はこの二人共に、彼ら自身の十字架を背負わされました。自分の自我を磔にさせ、「自分に死んで、キリストに生きる」その信仰の道を指し示されました。

17－19a節

そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼を受け、食事をして元気を取り戻した。

１７節で回心せられたアナニアは、キリストの使者として潔く出かけ行き、今の今まで大迫害者であったサウロに真直ぐに向き合い、「兄弟サウル」と呼びかけました。本当にありえないことが起った瞬間です。そしてアナニアは、サウロの頭上に手を置いて按手をし、サウロが真からキリストを仰ぐ者と変えられることを祈ったばかりか、今後、聖霊で満たされ続けるように主が自分をお遣わしになったことを告げ、洗礼をも授けました。

しかし、アナニアが、このような執成しのお祈りを献げ、サウロに洗礼まで授けたことが知られれば、裏切り者として、キリスト者たちから危害が及ばないとも限りません。けれども、聖霊の御心に抱かれているアナニアは、我身の保全やサウロの過去の行状など、もはや、そのような一切のことを斟酌しませんでした。その胸には唯、「キリストの御心なる＜神の器＞サウロに仕える」という神の御意志だけが、燦然と輝いていたのです。

そのように聖められたアナニアを通して、水のバプテスマと聖霊のバプテスマとを同時に授けられたサウロは、主イエス・キリストのかけがえのない伝道の器と変えられまし

た。大きなマイナスが大きなプラスへ転換され、欲望（サウロ）から小さき者（パウロ）へと改名した彼を通して、キリスト教の世界伝道、更には、世界の歴史・文化の大きな牽引が行われました。その貴重な第一歩が、ダマスコでの主の弟子アナニアの回心でした。

ところで、あるラジオ伝道牧師がこう言われました「私はアンデレのような伝道者になりたい」と。アンデレは、荒くれ漁師だった兄ペトロをキリストの御許に連れて行きました。また、初めて異邦人なるギリシャ人をキリストの御許に連れて行きました。そして、5つのパンと2匹の魚を携えていた少年を、五千人を前にしたキリストの御許に連れて行きました。アンデレ自身の説教や御業は聖書には記されていませんが、これら三人を、渾身の勇気を奮い起して、主の御許へお連れしたという行動は、キリスト教の伝道とその後の発展に大いに寄与致しました。

回心のアナニアやアンデレのように、主の御声に聞き従い、主が定められた御計画に仕えるべく、怖れや保身や自我やプライドを捨て去る。そして、其々の持てる賜物のすべてを喜んでキリストの御前に差出し、心から愛の業に励む。そんな教会の中にこそ、主は、香わしく美しく素晴しい福音の花を、次々と見事に咲かせてくださるのです。ハレルヤ！

写者あとがき

第26回は非常に長い構成になっていますので、前後二つに分けてみました。今回は前編になります。読み進んでいくうちに、対話をしたくなることが多くなり、その箇所で一言書かせて頂きました。11章をまとめて頂いて「信仰によって」の繰り返しの意義も理解できました。まことに聖書は導き手なくして読み進めないと実感します。啓示宗教として歴史の中に人格的に応答する真の神を崇めることができる福音の深さ、広さ、重さを感じます。

森容子先生の聖書解釈も丁寧で原典に即して解説を加えてくださいます。お二人の先生の共鳴によってこのシリーズがより豊かなものになっていくように感じて感謝しております。　　2023年9月5日。尚後編は9月中にオンします。